

コミュニケーションって

なんだ？

過渡期にある教育現場で、新たな「学力」として育成が求められている「主体性を持つて多様な人々と協働して学ぶ態度」。多様な人と協働するために欠かせないのがコミュニケーション能力です。ただし、社会に出て実践の場で求められるコミュニケーション能力は、生徒のイメージとは少し異なるかもしれません。一体、コミュニケーションってなんだ？ 報道番組で週5日、さまざまな現場取材し生中継を行う木村拓也さんのお考えを、2回にわたって連載します。ぜひ生徒と一緒に「コミュニケーション」の正体を考えてみてください。



きむら・たくや ● 2013年フジテレビ入社。情報・報道番組を中心に担当。「みんなのニュース」のコーナー「上を向いて歩こう!」では、全国で1000回以上の生中継を経験。現在は「Live News イット!」アクティブキャスターとして、現場から毎日生中継。TCS認定プロフェッショナルコーチを取得。

取材・文／塚田智恵美 イラスト／桔川シン

第2回

言うまでもないことを言う意味

コミュニケーションは「手を差し伸べること」?

何ができたならハッピー?

最近「総合的な探究の授業」などで、さまざまな課題に取り組みグループ活動を取り入れている学校も多いと聞きます。漠然と取り組むのではなく、活動の意図やゴールを明確にしてから活動を始めることを大事にしている学校もあるでしょう。でも意図やゴールの明確化というのと、仰々しくて難しく感じる生徒さんもうるはず。

ところで、大人の場合はどうでしょう。慌ただしく過ぎていく毎日のなかで「なんのために今からこの仕事をやるんだっけ?」とわざわざ考えたり、言葉にしたりする人はあまりいないかもしれません。でも僕は、できるだけ、毎日仕事に出かける前にこんな問いを考えてみることにし

ています。「今日の中継で何ができたならハッピーかな?」。

僕は今、全国のニュース現場から生中継を行っています。その現場に行く前に今日のゴールを考えてみるのです。例えば「今日は、この特産品のおいしさを伝えられたらハッピーだ」「今日の取材に協力してくださる農家の〇〇さんが喜んでくれるような内容にできたなら、ハッピーだ」など、できるだけ具体的に、あまり力まずに、自然な言葉にしてみます。

ある日は「今日はカメラマンの△△さんの誕生日だから、△△さんが『今日は最高の撮影ができた!』と誇れるような中継にできたならハッピーだ」なんて考える日もあります。一緒に働く人たちが楽しく仕事ができるのも、立派なゴールのひとつです。そして、こうして考えたゴールはできる

だけ言葉にして、中継チームのメンバーに伝えて、すり合わせをするようにしています。「今日は、今が旬のスイカのおいしさをできるだけ伝えられたらハッピーですね!」。この程度の易しい言葉で表現したゴールでも、中継に関わるメンバーの目標を揃えることができ、その日の中継がスムーズになったり、より良い議論ができるようになったりするので。

小さなミスを大きくしない

ゴールを言語化し、チームのみんなですり合わせる目的は、コミュニケーションの摩擦が起きたときのためでもあります。

どれだけ一生懸命仕事に取り組んでいても、ミスが起きてしまうことはあります。例えば、ちよとした行き違いが原因で、僕ら中継チームが取材先の方に伝えなければ



「わざわざ言う」ことで、関わり方が変わる？

ばいけない情報がきちんと伝わっていないかった、なんてことがあったとします。もし、それまで「仕事だから」と、目の前のことをただこなすような態度で取材先の方と接していたら、伝達不足のミスが判明した瞬間に、取材先の方は「この人は、私たちのことを大切に考えてくれない」と感じるでしょう。その結果、ひどくお叱りを受けたり、意思疎通が図れなくなったりして、中継はうまくいかなくなりそうです。

でも、もし「僕たちは、この場所の魅力を最大限、視聴者の方たちに伝えるために今日の中継をがんばります」といったゴールが、取材先の方にもちゃんと伝わってれば、伝達不足のミスが起きたとしても「ゴールに向かってみんなががんばっている過程で、仕方なく起きてしまったことだ」と、同じミスでも見え方が変わります。

ちゃんと話せばすぐに収まる話なのに、お互いの意図が見えないだけですれ違いが起きて、トラブルがどんどん大きくなってしまつ。これは同じ会社のチーム内でもよく起きることです。もちろんミスはできるだけなくさない人間などいません。小さなミスはコミュニケーションの摩擦で大きくしてしまわないように、わざわざ自分たちが目指すゴールを言語化し、関わる人たちに共有しておく意味があるのです。

逆に言うと、ゴールを共有しておけば、ささいなコミュニケーションの摩擦を怖がらずにすむようになります。「みんないい中継をつくるために」というゴールがあれば、

「ば、言ったら生意気かな」と思うような意見やアイデアも堂々とと言えるようになるのです。

ちなみに僕は大学時代に人力車の車夫のアルバイトをしていたのですが、そのときに掲げていたゴールは「日本平和な時間をつくる」。目指したい姿はたくさんありますが、僕が最優先するのは、人力車に乗っていた期間はお客様に平和な時間を感じてもらうことだ、と明確にしました。こうしてわざわざ言語化しておいたことが、学生時代の、月間売上1位といった結果につながったかもしれません。

「私には体験がない」？

みんなが「わざわざ言わなくてもいい」と思うようなことこそ、言語化して相手に伝える。このことの大切さを感じる場面はほかにもあります。

僕は大学生の就職活動のアドバイスをすることもありますが、志望動機や学生時代にがんばったことなどを綴る「エントリーシート」が書けないという学生が毎年一定数います。

そんな学生に向かって僕がわざわざ言う言葉があります。「人はそれぞれまったく別の生き物で、ただ生きてるだけでも異なる体験をしているもの。だから18年生きてきて『体験がない』なんてことがあはずがないよね」。そんなの当たり前だ、と思われるかもしれませんが、僕はこのことを必ず言葉にして伝えます。

すると、学生たちの硬かった態度が、ち

よつと解れる感覚があります。「私の大学生活は、全国チェーンのコーヒー店で4年間アルバイトしただけなのですが、それでも体験になるのでしょうか」なんてエピソードが出てくる。

そこで僕は「なぜ、そのアルバイトをやるうと思ったの？」と聞きます。わかりやすい実績や、体験の珍しさを問うのではなく、その人の根っこにある価値観や分岐点を知りたいからです。そうして問いを重ねていくと「この人はコーヒー店にこだわりのあるのではなく、長く何かを続けるということが大事だという価値観をもっている」などとわかってくる。これがエントリーシートに書く作文の種になるのです。

生きてるだけで体験している。そんな「わざわざ言わなくていい」ことを明確にして伝えるだけで、自分の体験を引き出す思考の出発点が変わるのです。

このように「言うまでもないこと」を言葉にして伝えるだけで、コミュニケーションが滑らかになる瞬間はたくさんあります。その結果、関わる人たちが向き合った相手に対して、自分ができていることが増えるのです。できること、とは「いい番組をつくる」のような目に見えることでもあれば、力を貸して助けたいと心の中で相手に思いを寄せるようなことでもあります。

そうして「コミュニケーション」は、「伝える」や「交流する」といった言葉を超えて、困ったり苦しんだりしている誰かに向けてそつと差し伸べる「手」のようになっていく。それが僕の思う「コミュニケーション」なのです。